

**ウチの図書館お宝紹介! (第169回) 神田外語大学附属
図書館所蔵 「洋学文庫」 - シーボルト直筆書簡・
ラーナウ『諸術秘蔵』 -**

著者	吉野 知義
雑誌名	図書館雑誌
巻	111
号	4
ページ	246-247
発行年	2017-04-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001406/



お宝紹介! 第169回 神田外語大学附属図書館

神田外語大学附属図書館所蔵 「洋学文庫」

—シーボルト直筆書簡・ラーナウ『諸術秘蔵』—
吉野知義

はじめに

神田外語大学は、1957（昭和32）年に東京・神田に開設されたセントラル英会話学校（現：神田外語学院）を礎とし、1987（昭和62）年に千葉県・幕張に開学した外国語学部のための4年制単科大学です。2016（平成28）年度の学部の在籍席学生数は3,886人で、英米語学科、アジア言語学科（中国語専攻、韓国語専攻、インドネシア語専攻、ベトナム語専攻、タイ語専攻）、イペロアメリカ言語学科（スペイン語専攻、ブラジル・ポルトガル語専攻）、国際コミュニケーション学科（国際コミュニケーション専攻、国際ビジネスキャリア専攻）で構成されています。そこでは、英語をはじめとするさまざまな言語の習得と多様なコミュニケーション能力の確立を軸とし、「一人ひとりが言葉を通じたコミュニケーションにより、お互いを認めあい尊重しあう、あたたかな世界をめざします。」をビジョンとして掲げる大学教育を行っています。

神田外語大学「洋学文庫」について

本学附属図書館所蔵の「洋学文庫」は、洋学と称される「蘭学」「英学」など外国語や海外の文化の教育・研究・学習のために幕末から明治初期に刊行もしくは筆写された書籍を収集したコレクションです。その中核をなすのは京都の古書店「若林春和堂」の店主若林正治氏（1913-1984）により収集された約1,400点の若林コレクションで、開学時に学校法人佐野学園に移管された若林コレクションに加えて、その後も洋学関連の書籍・コレクションを収集することで充実をはかっています。

本稿では、「洋学文庫」の中から、2015（平成27）年より神田外語大学日本研究所の町田明広・副所長ならびに松田清・客員教授（京都大学名誉教授）のもとで進められている調査・研究活動により、

日欧知識交流史・書誌学の観点から新たに確認された資料2点をご紹介します。

1. シーボルト直筆書簡

この書簡は、1828（文政11）年11月にシーボルト事件が発生し国外追放になる直前に、50名以上いた弟子の中のひとり「サイチ」こと、賀来佐一郎佐之（かく・さいちろうすけゆき）宛に自筆で記し送付したもので『日本植物目録』の草稿に挟まれた状態で確認されました。

鳴滝塾の門下生であった賀来に関してはこれまで歴史上謎が多いとされていましたが、この書簡により植物学におけるシーボルトの一番弟子とされている伊藤圭介と並ぶ重要人物であることが判明しました。シーボルトの書簡は日本に6本現存していますが、国外追放前に日本植物研究について書かれたものとしては日本で初めて発見されたものとなります。

シーボルトは、弟子の医師・伊藤圭介が名古屋から長崎に持ち込んだ約1,600種の植物標本に学名と和名を付けて分類し目録を作成する作業を、伊藤圭介とその兄弟子にあたる医師・賀来佐一郎佐之の協力を得て、1827（文政10）年10月末から長崎県の出島で精力的に行い、半年後『日本植物目録』の草稿を完成させました。この書簡の内容は、日本を離れざるを得ない状況に際して、彼が信頼していた二人の弟子に『日本植物目録』の草稿の改訂作業を急がせるとともに感謝の気持ちを伝えるものでした。オランダ語で記されたこの書簡からは、シーボルトが彼に植物目録の訂正を依頼している内容が読み取れ、同時に賀来のオランダ語の能力が門下生の中で突出していたことから厚い信頼を受けていた人物であることがわかりました。

なお、この書簡は、シーボルト没後150年であっ

た2016年、国立科学博物館「日本の自然を世界に開いたシーボルト」、およびシーボルト記念館「ケンペル

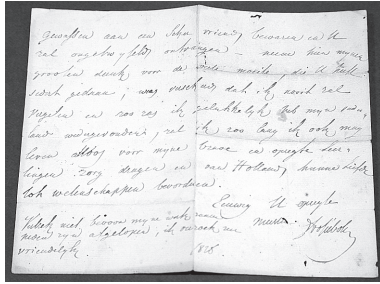


図1. シーボルト直筆書簡 右下にサインとシーボルト-二人の日本研究者-にて展示されました。

2. ラーナウ『諸術秘蔵』

『諸術秘蔵』は、蘭学者・宇田川玄随が名づけた書名で、アムステルダムの医師ウィレム・ファン・ラーナウ (1673-1724) が1719年1月から1723年2月まで編集刊行した隔月刊の博物雑誌『コンスト・カビネット』全9冊です。内容は、古代ギリシャ・ローマから18世紀初めまでの西洋博物書をわかりやすく紹介した啓蒙書となっています。「洋学文庫」では第2巻と索引巻の第9巻を除いた、残りの7冊を所蔵しています。本学所蔵の『諸術秘蔵』は、蘭学者・前野良沢 (1723-1803) が1783 (天明3) 年頃に漢訳した『火浣布』(かかんぶ) の翻訳に使用した原書と推定されています。

火浣布とは漢名で「火で洗うことのできる布」を意味し、アスベスト(石綿)のこと



図2. ラーナウ『諸術秘蔵』

です。江戸時代にはヨーロッパや中国でも入手困難とされていましたが、1764 (明和元) 年に博物学者の平賀源内と中川淳庵が秩父山中での発見により火浣布の作成に成功しています。

その10年後、前野良沢を指導者とする医師グループが1774 (安永3) 年「解体新書」を翻訳し、蘭方医の杉田玄白が出版しました。これを契機として、江戸で蘭学が勃興すると、良沢、桂川甫周、森島中良、大槻玄沢、宇田川玄随、徳川頼徳らの蘭学グループは、当時入手困難な珍品として評判となっていた火浣布も探求の対象としました。中でもオランダ語の読解力が抜群でラテン語やフラ

ンス語も研究していた良沢は、ウォイトの『医薬事典』、『ボイス百科事典』と合わせて『諸術秘蔵』に

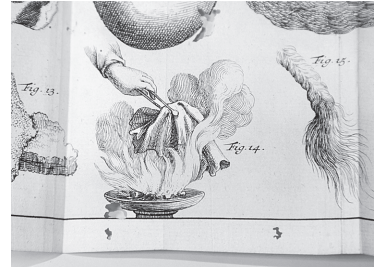


図3. 火浣布銅版図

書かれたアスベストの記事をもとに、漢訳『火浣布』を著しました。原書によってアスベストの薬効も詳しく紹介し、『諸術秘蔵』の銅版アスベスト図を訳稿の挿絵に用いています。これによりエレキテルとともに、江戸時代に火浣布ブームを引き起こすこととなりました。

良沢が同時に翻訳に利用したウォイトの『医薬事典』と『ボイス百科事典』は江戸時代に舶載された原本がいくつか残されていますが、ラーナウの『諸術秘蔵』はこれまで伝来本が知られず今回初めての発見となりました。

今回の調査により、原書を収めた木箱の蓋に貼られた二重のラベルから分類記号と思われる漢字「日」を墨書したラベルが出現し蘭癖大名などに特徴的な収納方法であるところから、松田客員教授は良沢の門人でパトロンでもあった紀州徳川家の九男頼徳が旧蔵者ではないかと推定しました。そこから実際に良沢が手にした原書である可能性が高いと分析しています。

引き続き調査・研究を行い、これまで収集してきた「洋学文庫」から新たな発見があることを期待し、外国語を専門とする大学として、外国語や海外の文化を吸収した歴史を振り返ることができると楽しみにしています。

■神田外語大学附属図書館

所在地：千葉県千葉市美浜区若葉1-4-1

<http://kuis.libguides.com/>

参考文献

- (1) 遠藤正治, 鳥井裕美子, 松田清. 神田外語大学附属図書館所蔵 シーボルト編/伊藤圭介・賀来佐之録「日本植物目録」について. 神田外語大学日本研究所紀要. 2016, no.8, p.31-87. <http://id.nii.ac.jp/1092/00001295/>.

(よしの ともし: 神田外語大学附属図書館)

[NDC10 : 090 BSH : 1. 稀書 2. 神田外語大学附属図書館]